

生活の水は どうもたらされた?

藩により川と水門、水路網のシステムが整備され、住民により維持され、水の供給に松原川も大きな役割を果たしました。



江戸時代の佐賀城下は、武家地が約1,000世帯あり、町人地には約14,000人が住む大都市でした*。多布施川^{たふせがわ}を通じて城下に運ばれた水は、水路網の仕組みによって城下の域内にくまなく供給されました。

多布施川から水を供給する12カ所の水門(井樋^{いび})のひとつが「ポンポン井樋」です。井樋を通じて石組みの底から水が「ポンポン」と音を立てて流入するこの井樋が松原川の源流です。「松原」(土手)のそばを東進し松原神社の脇で流れを変えつつ、小さな井樋と水路を通じて各屋敷に水が配られました。

水路の底に溜まった土砂を^{さら}浚う作業は住民の義務で、怠れば武士は給与から天引きされる罰則規定もありました。水路で繋がる水は、みんなの共有物です。江戸時代のはじめに藩が整備した川と水門、水路網のシステムを、住民が共働して維持をしていくという営みが大都市の暮らしを支えました。



*「籠帳」 嘉永7年(1854) 鍋島報効会所蔵/佐賀県立図書館寄託(鍋島家文庫) 三好不二雄・三好嘉子編『佐賀城下籠帳』九州大学出版会、平成2年



元文佐賀城廻之絵図 元文5年(1740)
鍋島報効会(徴古館)所蔵